さいたま市退職校長会会報

発行責任者
髙取廣美

退職校長会の一層の充実を

さいたま市退職校長会
副会長　佐藤　薫

私は昨年度まで理事として支部会議に出席しておりました。今年度は副会長としてお世話になります。

実は私は他の副会長とは違い大宮班の会長も務めております。これは、大宮班の藍川前会長のアドバイスによるもので、支部と班との連絡、調整を円滑に行えるようにとの配慮からです。その結果、確かに仕事量は増えましたが、間に人を経ることなく事を進めることができています。

今は支部の運営について少しずつ理解を深めている段階です。

さて、支部の役割は何かを私なりに考えてみました。

それは支部の傘下にある四つの班の活動をより一層活発にすることではないかと思います。

現役の校長は全市が異動対象となっており、否応なく旧市間の交流がありますが、退職校長会では依然として班の活動が中心です。「交流だより」等で他班の活動を紹介し、参加を促していますが、まだ交流が少ないのではないでしょうか。

四つの班の交流がさらに促されるために、まとめ役としての支部が期待されていると思います。

たとえば、各班の事業の予告とその報告を掲載する「交流だより」に加えて、各班が実施している事業の実務担当者の情報交換の場を作るのも、その一つだと思います。

数年置きに開催し、各行事の目的、会場、講師、運営方法などのアイデアや逆に苦労などを情報交換して班の行事に生かすことができたらと思います。

最後に各班の益々の発展を祈念してあいさつとします。

—佐藤　薫 副会長 —

目次

◇巻頭言　さいたま市退職校長会　副会長　佐藤　薫　1

◇令和七年度　さいたま市現職・退職校長　教育推進研究協議会
○研究協議会概要　2
○研究発表要旨　3
中島小学校　校長　高橋　周一　3
八王子中学校　校長　酒井　和浩　4
退職校長会　中山　時次　5

◇教育情報　さいたま市の教育『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進　さいたま市教育委員会　6

◇班だより
○浦和班　武井　悟　7
○与野班　山岡　康幸　7
○大宮班　松井　聡　8
○岩槻班　吉田　哲人　8

◇談話室　～私の一言～
紺野　達郎・上原　善一　9
柴﨑　信光・丸橋　酉重　10
野澤　髙・柳　紳一　11
八木澤龍馬　12

◇ご長寿者一覧表　12

◇編集後記　12
題字：髙取　廣美

令和七年度さいたま市 現職・退職校長教育 推進研究協議会概要

令和七年十一月二十一日（金）市民会館おおみやにて、現職校長四十六名、退職校長四十六名の参加を得て開催された。ご来賓に、さいたま市教育委員会学校教育部参事　寺内　啓容　様、埼玉県退職校長会会長　新井　俊一　様をお迎えした。

一　開会行事

並木事務局長の司会進行、中学校長会 玉崎会長の開会の言葉にて協議会が開催された。

【主催者あいさつ】高取　会長

刻々と変わる社会情勢に伴う多岐にわたる教育課題に対し、県退職校長会では今年度に取り組む活動の一つとして「彩の国教育の日に関わる諸活動の充実」を目指すこと、また、本市でも「Well-being(幸せ)を保障する教育」の実現を目指すことを掲げている。私共、教育に携わる者が皆等しく共有しているのは、個々の子ども達の健やかな成長と幸せな未来への願いであり、そのための学校経営、コミュニティスクール、生涯学習、社会貢献である。本日は、それぞれの立場からの実践を基に、実のある協議会が進められることと楽しみにしている。

【来賓あいさつ】

寺内　学校教育部参事

本市の教育について情報を提供させていただく。七月末に公表された全国学力学習状況調査の結果では、全ての科目において全国の平均正答率を二・七～十二・〇ポイント上回っており、学力について引き続き良好な状況にある。また、生活習慣や学習環境に関する調査では、困りごとや不安があるときに、先生や大人にいつでも相談できるという回答が、全国より十ポイント以上上回り、本市の学校教育が学校と児童生徒の信頼関係に支えられ、温かい環境のもとに行われていると考えている。

文化・運動面では、全日本吹奏楽コンクール全国大会で土屋中学校が金賞、東日本学校吹奏楽大会で大宮南中学校、大宮南小学校が金賞、つばさ小学校が銀賞を受賞した。全国中学校体育大会では、個人種目において、田島中学校の柔道部が第三位、片柳中学校の陸上競技部・男子棒高跳びが全国優勝、準優勝に輝いた。団体種目では、埼玉県駅伝競走大会において、美園南中学校の男子駅伝部、常盤中学校の女子駅伝部が三位になり、関東大会への出場を決めた。これらの成果は、これまでの伝統の上に、現職の校長先生方の確かな教育実践が積み重ねられているお蔭と感謝申し上げたい。

【来賓あいさつ】

新井　県退職校長会会長

県内各地区の協議会における退職校長の発表内容はバラエティに富んでいる。共通するのは、自分で見つけて、創って、深めて、みんなで分かち合っている点である。退職後も学力ならぬ〝楽力〟を発揮しており、元気をいただける。本日の発表も楽しみにしている。

二　研究発表・研究協議

研究部　染谷、柴崎両幹事により進行される。（以下後述）

三　閉会行事

小学校校長会 永山会長の閉会の言葉にて、協議会を終了とした。

（文責　豊島　登）

研究発表　要旨

◇小学校教育の諸課題

「学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校運営『元気いっぱい、笑顔いっぱい』の学校をめざして」

中島小学校
校長　高橋　周一

— 高橋 周一 校長 —

一　はじめに

○活力ある学校組織とは

①教職員の笑顔（生き生きとやりがいをもって教職員が働いている）、②保護者・地域の笑顔（学校・ＰＴＡ・地域の関係性が良好で連携できている）、③児童の笑顔（教育環境が健全・良好で児童が安心して学校生活を送っている）。この三つの笑顔のトライアングルより、人とのつながり・交流・協働・多様性が生まれ、学校組織全体の活性化に繋がると捉えている。

二　教職員の元気・笑顔が起点

①勤務間インターバル十一時間、ノー会議デーの推進。個に応じた働き方を可能とするワーク・ライフバランスの改善で組織活性化。

②授業時数等の削減、教育活動・行事等の精選。空き時間の確保や教育活動の見直し・集約による業務負担軽減。職員間の合意形成にも留意。

③組織サポート体制の整備、効率化。子育てや介護との両立、若手教員の増加を踏まえた補教・補充。生徒指導事案等の早期対応と役割分担。急な担任不在や、若手サポートを想定した体制づくり。「一ビルド・一スクラップ」の原則。

三　保護者・地域との連携、協働活動の推進

①「あいさつ運動・あいさつ通り」の取組。学校運営協議会、育成会、ＰＴＡの連名で横断幕を作成し、通学路の複数個所に「あいさつ通り」の横断幕を掲示した。学校に関わる全ての人が学校外でもあいさつを交わす運動を推進している。

②保護者・地域ボランティアの募集。防犯・学習支援・図書・飼育・除草など様々なボランティアを募集し、教職員の負担軽減や持続可能な教育環境整備の協力を依頼し、児童が安心して学べるよう支援を求めた。ＰＴＡや育成会とのつながりは、児童の居場所が広がり、地域への所属感も強まる。

四　児童の元気・笑顔がゴール

①児童主体の教育活動。児童が自ら課題を乗り越えて、達成感を味わうことができる授業改善。児童に問いかけ、自ら考えさせて自立を促すコーチングの手法を取り入れた指導。自立や主体性を育てるルールメイキングや集会活動等の工夫。こうした取組は児童の笑顔や成長を促し、教職員や保護者等の更なる活力にもなる。

②外遊び・交流活動の推進。外遊びの推奨や週に一回三十五分間のロング昼休み設定で教職員との交流。縦割り遊びでの異学年交流や給食での交流活動を行う。

③学校や地域への愛着の育成。朝会で校章の由来や地域から出土した埴輪、学校の歴史や地域行事の紹介をする。開校記念日を学校全体で祝うなどして母校愛、ふるさと愛を育てる。

五　まとめ

現今の学校教育には、多種多様な変化が求められている。活力ある組織づくりには、短期・中長期的課題を精査し、インクルーシブな視点を持って学校運営にあたらなければならないと考える。

◇中学校教育の諸課題
「コミュニティ・スクールを活用した生徒のエージェンシーの育成」

八王子中学校
校長　酒井　和浩

— 酒井 和浩 校長 —

一　現状と課題

㈠学校運営協議会

小・中学校合同で「あいさつのできる児童生徒の育成」を目指すなか、子どもたちの現状から、中学校は防災、小学校は交通安全を軸に、エージェンシーの育成を図るためにどうしたらよいかが話題となった。

㈡学校・家庭・地域の要望

「自己肯定感」、「自主性」、「地域貢献」などのキーワードが熟議の中から見いだされた。また、防災への若い人材の活躍を願う地域の姿も明らかとなった。

二　取組の方向性

㈠学校運営協議会の方針

熟議の内容をもとに、中学校では生徒に身に付けさせたい力を「主体的に考え判断する」「根拠に基づき、公正に判断し主張する」とした。さらに、九年間を通したエージェンシー育成ビジョンを作成し、小・中学校、家庭・地域で共通理解を図った。

㈡生徒の現状と意識付け

子どもたちは日々の学習や部活動等忙しいため、先ず既存の取組である「あいさつ運動」や「緑化ボランティア」等の取組を生かし、自ら進んで地域貢献できる手段を探った。生徒と地域が「顔見知り」になり、安心して活動できる環境作りから始め、今まで以上に地域との連携を図ることとした。

三　取組の計画

㈠取組の流れ

市教委から研究指定を受けている「防災教育」と「コミュニティ・スクール」の研究成果を生かした地域連携を柱とし、計画を進めることとした。

㈡学校における取組

先ず、防災教育の視点からは、地域で起こり得る災害やその対応について、地域の方を交えて学んだり、中学生として自分が出来ることを考え、避難訓練に参加したりできるようにした。またコミュニティ・スクールの視点からは、家庭、地域、小学校と連携したあいさつ運動や緑化ボランティアなどを通し、地域の一員として人間関係が構築できるよう環境づくりを進めた。

四　地域連携における取組

㈠防災教育の取組

地域の避難訓練時に、生徒が受付を行ったり配付物をまとめたり避難所の運営側として参加したり、地域の方を講師として招き、家庭や地域の方と共に学んだりした。

㈡コミュニティ・スクールを生かした取組

小・中学校と地域・家庭合同のあいさつ運動、地域行事に生徒が運営側として参加、合唱コンクールにＰＴＡ有志が参加等顔を合わせる機会を設定した。

五　変容

一歩一歩ではあるが、①地域と生徒の風通しが良くなった。②徐々に自分の行動に自信を持つ生徒が増えてきた。③生徒が地域への関心を持ち始めた。などの変容が見られた。

六　今後

活動を進める中で、学校全体の活発化や生徒の人間的な成長、多方面からの「エージェンシー」の育成など多くの成果を得ることができた。今後も、学校が地域との調整役として機能し、小・中学校・地域・家庭がＷｉｎ・Ｗｉｎの関係となるよう、一層の連携が深まるよう努めたい。

◇生涯学習上の諸課題
「南三陸町訪問支援と子ども食堂の開設」

さいたま市退職校長会
中山　時次

はじめに

「たった一人しかいない自分を、たった一度しかない人生を、本当に生かさなかったら、人間、生まれてきた甲斐がないじゃないか。」（山本有三「路傍の石」より）

退職後の人生も、たった一度の人生だから出会いを大切に有意義な人生を送りたいという思いからの実践を発表する。

— 中山 時次 会員 —

一　南三陸町訪問支援

若いころから先輩に誘われ、ボランティア活動に取り組んできた。その仲間たち（上尾、桶川、北本、地元の伊奈）と、震災後「百万円」を合言葉に募金活動に取り組んだ。

しかし、形の見える支援ができないかと考え、南三陸町で支援活動を続けている方を講演会に招き話を聞いた。「とにかく一度見に来て」の声を受け、二〇一二年七月、先遣十一名で現地に入り、いまだ悲惨な状況を目の当たりにして、すぐに訪問支援を開始した。その後大型バス四十七名、五百人分の物資にて現地を訪問。

・仮設団地での炊き出し・茶話会・傾聴ボランティア
・石巻大川小学校等での慰霊
・南三陸町社会福祉協議会への寄付

等の活動を展開した。

そこでの心構えとして、

・被災者にごまかしや偽善は通用しない。真剣勝負、自分の気持ちを優先しない。
・相手の気持ちを理解し何を言われても根気強く話を聞く。
・がんばれと言わない、「大変でしたね、お体はいかがですか、心配なこと、困っていることは何ですか」（私たちは忘れない～一緒にいる）

現地での様々な体験談をお聞きして、訪問当初の諸課題に驚き、訪問を繰り返す中でいまだに数多くの課題が残され、新たな問題が生じていることに気づかされた。

十三年間二十五回の訪問により、被災者との絆が深まり、被災者が私たちを親戚同様に思ってくれることが嬉しい。これからも訪問支援をできる限り継続したい。

この間に、非常勤講師をしていた埼玉大学の学生たちをエスコートして大川小学校での慰霊を実施した。

また、能登半島地震が起きた直後には、家族と仲間たちで上尾駅に立ち募金活動を行った。

二　子ども食堂の開設

子どもの貧困が三人に一人。五年前、ボランティア仲間と何とかできないか考えた結果、子ども食堂を開設することにした。苦労したが、皆が安心して活動できるようにと、二年かけて、二〇二一年六月三十日にＮＰＯ法人を設立した。

現在は、コミュニティセンターの閉鎖により会場を北本市総合福祉センターに移して活動している。

弁当を作る人も受け取る人も笑顔の「すまいる食堂」「微力ではあるが無力ではない」「出来ることを出来るまで」

おわりに

自分でできることをと心がけてきたが、やはり仲間の存在は欠かせない。校長をしていたことで頼りにされ、仲間を広げてゆく過程でそれが役に立ったなら「されど校長」に感謝。

教育情報　さいたま市の教育

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

国の第4期教育振興基本計画において、2040年以降の社会に向けて、「主体性」「創造性」「課題設定・解決能力」「チームワーク」などの資質・能力を備えた「持続可能な社会の創り手」の育成が求められており、そのためには、子どもたちがエージェンシー（※1）を身に付けることが重要です。そこで、自ら学び、考え、主体性を持って行動する力の育成を目指し、日々の授業実践において、デジタル学習基盤を効果的に活用した「主体的・対話的で深い学び」の実現に努めています。

令和6年度は、指導主事が全ての教師の授業を観察し指導・助言を行う「指導訪問」において、「学習者が主体的に学ぶ授業」の実現に向けたチャレンジを促したり、新たに指導訪問後のフォローアップ体制を整えたりすることで、教師一人ひとりの実態に即した適切な指導・助言を行えるようにしました。また、「学習者が主体的に学ぶ授業」という視点で、教師が常に自身の授業を客観的に振り返り、授業改善に資することができる「学びの指標」（※2）の本格的な運用を始め、全校調査を2回実施しました。各学校においては、その結果を指導主事による指導と合わせて活用することで、授業改善や指導力の向上を図りました。

令和7年度は、「学習者が主体的に学ぶ授業」の一層の実現に向け、特に、答えのない課題を解決するために不可欠となる「深い学びの実現を目指した探究的な学び」を推進しています。具体として、既存の授業モデルである「さいたま市アクティブ・ラーニング型授業」（授業者の視点）と、「学びのポイント（じ・し・ゃ・ク）」（※3）（学習者の視点）を統合し、授業者と学習者の双方が、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、習得、活用、探究する学習の流れをデザインできるようにする「学びの探究コンパス」の策定を目指しています。この取組により、資質・能力をはぐくむ深い学びの実現に向けた授業改善をより一層推進していきます。

※1　「エージェンシー」とは、社会的な文脈の中で、変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力のことをいいます。

※2　「学びの指標」とは、児童生徒による「学習者の視点」からのアンケートによる振り返りと、教員による「授業者の視点」からの振り返りとの往還による授業改善を図るための指標です。

※3　「学びのポイント（じ・し・ゃ・ク）」とは、学習者主体の学びを目指すために、教師及び児童生徒が意識すべきポイントをまとめたもので、「じぶんできめる（学習計画や学習方法の選択や決定）「しこうする（考え方の習得や思考ツールの活用）」「やってみる（（ICT 等を活用した考えの表現、社会に向けた情報発信））を、「クラウド」を基盤として行うことを目指します。

班だより

○浦和班　武井　悟

さいたま市浦和退職校長会は、令和七年度四名の新会員を迎え百九十名でスタート。「会員の親睦と福祉の増進、教育振興に寄与、現職校長への支援」をテーマに活動を進めました。

◇総会並びに長寿祝賀会・新会員歓迎会

五月十一日（日）竹居教育長をお迎えし、さいたま共済会館にて開催。終了後、長寿祝賀会（喜寿・米寿）及び新会員歓迎会を実施しました。

◇一日研修会

～宇宙開発の未来と戦後八十年から辿る平和への旅～

六月十七日（火）二十四名参加で、ＪＡＸＡ筑波宇宙開発センターと阿見町にある予科練平和祈念館を見学しました。最新科学と未来への想い、恒久平和への願いを深め、充実した研修会になりました。

◇うらわかい同好会活動

ゴルフ、ハイキング、麻雀、囲碁など八つの同好会があります。中でもゴルフ同好会は、年二回「親善ゴルフ」を開催し、他班からも多くの参加者を迎え楽しく活動しています。

◇親睦旅行

～ちょっと近場のちょっと贅沢な日曜日～

十一月三十日（日）富士東京美術館で西洋美術を鑑賞し、豆腐料理に舌鼓を打ち、みかん狩りを楽しみました。

◇会誌「もくせい」の発行

三年に一度の発行で、今年度は第十六号になりました。会員の仕事、趣味、健康法等が綴られ充実した内容となりました。

◇年末懇親会

十二月二十一日（日）埼玉会館を会場に開催し、会員相互の交流と親睦を深めました。

○与野班　山岡　康幸

さいたま市与野班退職校長会は、桑原裕通会長を中心として、十二名の役員が承認され全四十五名でスタートしました。

一　定期総会・教育懇談会

五月九日（金）ブリランテ武蔵野を会場に、令和六年度の事業報告や決算・監査報告、また、令和七年度の事業計画や予算案・新役員について審議されました。総会後は、同会場一階の「かっぽう好日」にて教育懇談会が開催され、今年度の結束を誓い合いました。

二　研修会

十月十七日（金）与野西中学校学校地域連携室にて開催。

社会保険労務士、行政書士、マンション管理士のほかに多彩な資格を取得して、また、高座名「参遊亭廣の游」を拝している廣瀬土夫氏を講師に招聘し「成年後見制度と相続・遺言の基礎を学ぶ」についてご講演をいただきました。

講演に先立ち、落語で現代の高齢化社会を取り巻く不安と終活の必要性を面白可笑しく話していただきました。本題では、漠然とした不安から脱出する糸口として、生前準備と相続の流れや遺言書などについて、法律用語を分かり易く解説していただきながらお話をいただきました。聴者の私たちも各自が個別具体的に残りの人生を考える契機となりました。

三　現職・退職校長教育懇談会

十二月十二日（金）ブリランテ武蔵野を会場に開催しました。当日は中央区長にもご臨席いただき、現職の校長先生方からは、各学校の近況報告があり、私たちからは現在の生活状況等が話され、交流を深めることができました。

○大宮班　松井　聡

【令和七年度のスタート】

○四月二日、新旧理事会開催
今年度活動計画案の作成と総会の準備等

○五月十七日、大宮退職校長会総会開催　本年度会員数二百三名（五月現在）

【定例会等の実施】

○幹事会・理事会（各四回）

○部会（広報・研修・福利厚生）（各二回）

○美術展実施委員会（二回）

【広報活動】

○「会員だより」第六十四、六十五号の発行。ＨＰの更新。

【研修活動】

○本年度テーマ「児童・生徒の不登校問題等を考える」。年々増加する不登校児童生徒の対応について、本市の取組を学んだ。

【会員の親睦を深める…】

○「懇親会」の実施
五月十七日の総会終了後、「懇親会」を盛大に開催した。美酒に酔い、新入会員も含めて互いの近況を語り合った。年度のスタートに当たり、和やかなうちに会員相互の親睦を深めることができた。

○「懇親旅行・史跡巡り」
十月十日、東京浅草エリアで「懇親旅行」を実施。穏やかな天気のもと、浅草下町界隈をのんびりと巡った。昼食は銀座で豪華？フレンチとしゃれこんだ。また、十一月二十八日には「史跡巡り」を実施。遷喬館など岩槻藩ゆかりの地を散策。岩槻の歴史ある神社・仏閣などについて、新たな発見をすることができた。

【第二十六回美術展の開催】

○十一月十日から一週間、恒例の美術展を開催した。絵画・書・写真・工芸等、二十七名の会員から六十四点の力作が寄せられた。一週間の来場者数は延べ七百三十七人。「素晴らしい作品揃いで大変癒されます」「先生方の歩まれた人生の豊かさを感じます」「来年も楽しみ」など、今年も多くの皆様から好評を頂いた。芸術の秋に相応しい、充実の美術展となった。

○岩槻班　吉田　哲久

さいたま市岩槻班退職校長会は、四月十九日(土)、料亭「ほてい家」で開催した定期総会・懇親会を皮切りに、大河内哲二新会長の下、新会員一名を迎えた総勢四十七名にて今年度の事業を推進しています。

一　講演会「岩槻の人形」

六月二十九日(日)「にぎわい交流館いわつき」にて地元江戸木目込み人形の伝統工芸士を講師にお招きし、人形作りの歴史や伝統文化を継承する取組、思い等を拝聴しました。地域に生きる氏の姿から多くを学びました。

二　干支の木目込み人形作り

十二月七日(日)・十四日(日)の二日間、何れも岩槻本丸公民館にて恒例の木目込み人形作りに取り組みました。四年目を迎えた今年の干支は「午」。今回も素敵な作品が仕上がりました。

※講演会と人形作りには、今年度も他班の方々にご参加いただきました。誠にありがとうございました。

三　日帰り研修旅行

十月九日(木)参加者十九名で栃木県「大谷資料館・ろまんちっく村・宇都宮美術館」を巡りました。旧交を温め、見聞を広める楽しい一日となりました。

四　現退職校長教育推進協議会

二月七日(土)岩槻本町公民館にて開催されます。協議会終了後は、近くの料亭「鮒又」にて懇親会も予定されています。

五　その他

対外連携事業で区内小中学校、関係機関に配付した「学校・地域を支援するボランティア一覧」を活用しての授業支援、児童センターでの講座等による連携の充実化、本会グループLINE作成による連絡体制の効率化・経費削減等も図られています。

談話室

―私の一言―

なせば成る

紺野　達郎

私の好きな歴史上の偉人に上杉鷹山公がいる。

以前、山形県の米沢に行って、その足跡を調べたことがある。江戸時代中期、鷹山公はわずか十七歳で、借財が二十万両ある米沢藩十五万石第九代藩主に現宮崎県の高鍋藩から養子に入る。上杉謙信公からなる名家ゆえの古いしきたりなどもあり、様々な反対をされながら、倹約や開墾など、苦労と努力を重ねて改革を成功させ、藩を立て直す。その後は、三十五歳の若さで隠居して、家督を前藩主の実子に譲っている。その決断力・計画性・行動力・潔さに感銘を受けた。

鷹山公は次期藩主や家臣の心得として伝えた「伝国の辞」とともに、教訓として「なせば成るなさねば成らぬ何事も　成らぬは人のなさぬなりけり」という歌を残している。この歌を私は自分の戒めにしている。意味は「人が何かを為し遂げようという意思を持って行動すれば、何事も達成に向かうのである。何も行動を起こさなければ良い結果には結びつかない。結果が得られないのは、人が為し遂げる意思を持って行動しないからだ。」である。

私は、この言葉を「努力をしても必ず成功するとは限らない。しかし、努力をしなかったら物事を成し遂げることはできない。だから努力することが大切なのだ」と置き換えて、解釈している。

ただ、常々このようでありたいとは思ってきたが、できないことばかりだった。反省することばかりである。

一人旅

上原　善一

今、自分のブームになっている楽しみは「一人旅」である。決して遠くへ行くわけではない一泊程度の一人旅である。安い宿を見つけ楽しんでいる。私は温泉が好きで必ず温泉地を選んでいる。一人旅の魅力は何といっても全てを自分で選択できて、どんなルートを選ぼうが何を食べようが自由なのである。

私の趣味は写真撮影である。写真を撮っているときは、同じ場所で何枚も設定を変えてチャレンジしている。またちょっと戻ってまた撮りたいと思う時がある。そんな時は誰にも遠慮なく好きなだけ時間を使えることが醍醐味である。写真のテーマは「苔」である。苔の撮影はどうしても山の中に入っていく必要がある。場所によっては一時間以上重い機材を持って山を歩かなくてはならない。気に入った場所では機材をセットし撮影して片づけ、また、重い機材を背負って歩き続けることの繰り返しである。こんなことは一人でなければできないが、想像以上にくたくたになる。山歩きで疲れた体を癒すのはやはり温泉である。そんな一人旅でのおすすめは群馬県草津町の草津温泉と群馬県中之条町にある「チャツボミゴケ」、もう一つは、栃木県日光市の鬼怒川温泉と栃木県塩谷町にある「尚仁沢湧水」のセットである。一人旅を通してまだ行ったことがない場所を訪ね地元のおいしい食べ物を味わい、名湯につかり、趣味の写真撮影を続けたい。そのためには、体力づくりと今まで以上に健康に気をつけ楽しみたいと思う。

下山の道のり

柴﨑　信光

月日に関守なし。退職して十八年、晩成もせず永らえてきた。振り返ると「節目に友あり、曲がり角に師あり」だ。本当によき出会いに恵まれた。

かつて、ある先輩から「七十五を過ぎると体の節々が痛くなり、八十を過ぎると物忘れが激しくなる」と言われたが、今、それを実感している。医者通いが多くなった。かかりつけ医には「塩分控えめ、適度な運動を」といつも指導を受けている。

そんな中での楽しみは、新幹線で行く名所旧跡巡りだ。

四国巡りで小豆島まで足を延ばしたとき不思議な体験をした。「二十四の瞳」の映画村でのことだった。映画のセットがそのまま残っており、昭和にタイムスリップしたようだった。校舎はもちろん古びた木造校舎だ。廊下から教室をのぞくと、黒い黒板、教壇、教卓、十二個の机と椅子があった。教室の中に入ると老婦人が「あらあら、椅子出しっぱなしで・・」と言いながら、机の下に丁寧に椅子を入れていた。思わず目がいった。振る舞いからきっとすてきな先生だったんだろうなと思った。教壇に立つと教卓の上に古い名簿が置いてあった。それを開くと急に昭和四十五年、教師になって初めて受け持った三年四組の子どもたちの名前が浮かんできた。どんどん出てきた。何かとても不思議な感じになった。

二十四の瞳が我を射すごとし
赤裸赤裸に心開けば

青年教師だった頃の熱き思いが甦ってきた。これぞ旅の恵みかもしれない。

下山の道のりには、どこからともなく老いと健康の問題が現れてくる。人生百年時代、老いを自覚しながらも悠々と豊かな時間を深めていきたいと思う。

私の家族史

丸橋　酉重

親兄弟の中で、私だけが戦争を経験していません。

父は日清終戦翌年の明治二十九年に、母は日露終戦の年の明治三十八年に生まれました。

長兄は大正十五年、次兄は昭和三年に生まれました。

昭和十七年と十八年に十六、七歳の少年通信兵として志願し、太平洋戦争に従軍しました。

終戦の年は、長姉は国民学校高等科二年、三兄は初等科五年、次姉は三年、四兄は一年でした。

戦中は、空襲警報と同時に消灯。全員が墓場に隠れました。

我が家史は明治二十九年から昭和二十年まで、四十九年間です。

約五十年の間に、日本は日清、日露、第一次、第二次大戦と、対外戦争を四回も経験しました。

昭和二十年八月、終戦の数日後に、私は生まれました。

秋に、次兄が戦地から無事に帰郷した時、次姉が嬰児を抱いて歩いているのを見ました。

どこの家の子なのか、と兄。

私達の弟だよ、と姉。

兄と私の初対面でした。

終戦直後は、農家でも、小麦などの食料に不足しました。

母は乳飲み子の私をおぶって買い出しに行きました。

子供が多かった父母は食料の確保に苦労したと聞きました。

去年の終戦記念日に、三兄に会い、戦中の様子を聞きました。

兄は突然目頭を押さえました。

「おっ母さんがなぁ。お前をおぶってなぁ。」

買い出しに行く母の後姿を思い出して込上げたようでした。

戦後八十年という長期間に、日本国民は戦争をしていません。日本人の戦死者はいません。

「自由の子」、「民主の民」

戦後の校歌はこの理想を掲げています。私はこの教育を受けたことを誇りに思っています。

青森紀行

野澤　高

昨年八月三十一日・九月一日の二日間、青森を代表するお祭り「弘前ねぷた」と「青森ねぶた」を見学した。

初日は「弘前ねぷた」。幸いねぷたのスタート地点の席が取れたので来賓紹介も見られた。紹介された来賓は「ヤーヤドー」と大声で不思議な返事を返す。

いよいよ「ねぷた」の登場。直径十ｍはあろうかという厚切りの蒲鉾型の左右の平面に勇壮な武者絵が描かれている。てっぺんには数人の男性が乗っていて、電線に架かると上部をパタパタと左右に折る。またねぷた全体も上げ下げできる。驚きのからくりだ。後ろには笛太鼓のお囃子連が続き、その後に件の「ヤーヤドー」の掛け声と共に連の人たちが続く。自治会、幼稚園、自衛隊など様々連の人たちが自分達の大ねぷたを先頭に延々と続く。各連共にメインねぷたの他に趣向を凝らした小ぶりなねぷたを幾つも引いて行く。予想以上に実に壮大で大掛かりな祭だった。

翌日は「青森ねぶた」。スタートゴールの中間位に陣取った。

青森の「ねぶた」は立佞武多（たちねぶた）と呼ばれ、武者や妖怪大蛇などが完全に立体に組み立てられ、鮮やかな彩色と相俟って迫力満点。製作には一年を要するという。大きなものは十ｍ四方の台車に載せられ、お囃子連、連の人たちが続くのは弘前と変わらない。掛け声は「ラッセラッセラッセラー」。ただ跳人（はねと）と呼ばれる踊り手が沢山見られるかと期待していたが、来るまでに疲れたのか少ししか見られなかったのが残念だった。ねぶたは時々向きを変えて観客に向かって突っ込んで来るのでその度に歓声が上がる。

「ねぷた」と「ねぶた」。地域の伝統を愛し大切守り続ける弘前青森の方たちの熱い思いに触れた二日間だった。

大人の遠足

柳　紳一

昨年の秋、軽井沢の離山（はなれやま）に登った。浅間山が初冠雪した朝で紅葉に白く化粧した姿は美しかった。

学生時代の山のサークルの同期と「大人の遠足」と称して、低山を歩いている。

山を降りると、温泉付きの自炊宿に向かう。途中、食材の調達に地元のスーパーに寄る。その日の献立は、もつ煮だ。学生時代のテント生活を思い出す。適当な役割分担でことが進んでいくのが心地よい。

自分達で作った料理で、夜の更けるまで、酒を酌み交わす。古希を迎えた五十年前の若者達は、元気である。

リタイヤして十年が経ち、社会が大きく変わった気がする。コロナ禍は、リモートワーク、リモート授業、飲み会までがリモートで行われた。我々も時世に合わせてリモート飲み会をした。遠隔地の友と気軽につながり、近況を伝え合ったり、思い出話に花を咲かせたりそれなりに楽しい時間だったが、何か足りなかった。見る聞く話すはできてもぬくもりや匂いがない。昭和の人間には今一つ馴染めなかった。人と人とが直接触れ合い、一緒に何かをすることの大切さを知っているからだろう。

そんな中で、大人の遠足は、始まった。気の置けない友と飾らない自分が出せるこの時間が私にとって穏やかな時間になっている。

現在、人権擁護委員として活動している。様々な悩みを抱えている方と相談に乗る機会も多い。限られた時間で解決の方向性を見出すのはたやすいことでない。だが、相談者が、少しでも穏やかで温かな気持ちになってくれたら、と考えているこの頃である。

晴耕雨読の日々

八木澤龍馬

今日は、雨が降っているので、原稿を書く時間できた。普段は、曜日に関わらず、農作業に明け暮れて。趣味や娯楽は、ほぼ雨の日に限られている。そんな晴耕雨読の日々を楽しんでいる。

定年退職後四年で公務を退き、父親から農地を継いだ妻と共に、農業に従事するようになった。ジャージやスーツを脱いでから、もうすぐ二年。農家のおやじに、ずいぶんなじんできたと思う。

最近、「学校を辞めて、何をしているのか」と、よく訊かれる。「田んぼを相続した妻と一緒に、米を作っている」と答えると、「いいねえ、悠々自適だね」と返ってくることがある。

朝夕の渋滞や混んだ電車とは無縁となった。日の出が始業、日没とともに終業である。梅雨の頃、田に水が入ると、晴れた夕方は夕日が映る。稲が丈を伸ばす夏、田は緑に染まる。秋は、黄金色の穂が風にそよぐ。四季折々の景色を楽しむ毎日は、悠々自適かもしれないが、正直、その境地には、まだ達していない。

地球温暖化といわれる昨今、この風景を保つには、猛暑、少雨、虫害、雑草への対応は必須である。経営が破綻するほど安かった米価が一転、ちょっと一息ついたが、今年はどうなるのだろう。自然環境や社会情勢の変化は予測が難しく、苦労である。近隣では、米作りをやめる人が増え、田畑の荒廃が進んだ。

苦労はあるが、農業を続ければ、ふる里の景観を保全し、世の中に食の提供ができると考える。悠々自適には至らずとも、晴耕雨読の日々が社会の役に立つのなら、頑張ってみようと思う。

追記。今回、思いを述べる機会をいただき、ありがとうございます。旧知の方々、これから出会う皆様、よろしくお願いします。

慶祝　ご長寿者〔令和７年度〕（敬称略）

上　寿 満１００歳	清水　宏（大宮）
米　寿 満８８歳	山岡　義昭（浦和）　原田　光三（大宮）　澁川　侶章（大宮） 浅香　敬（大宮）　河田　捷一（大宮）　福原　健治（岩槻）
傘　寿 満８０歳	橘　克彦（浦和）　橋本　進（浦和）　大澤　敬司（浦和） 飯田　一恵（浦和）　小池　誠一（浦和）　増田　徹（浦和） 小森　俊秀（浦和）　佐藤　邦彦（大宮）　安野　進一（大宮） 丸橋　酉重（大宮）　澤邉　和彦（大宮）　渡辺　信男（岩槻） 佐藤　憲克（岩槻）

編集後記

会報第４３号をお届けします。今号は、現職・退職校長教育推進研究協議会の特集です。ご発表をいただきました諸先生方をはじめ、ご協力いただきました皆様に、改めて御礼申し上げます。今回も、多くの皆様方から貴重な玉稿をお寄せいただきありがとうございました。

余寒厳しき折、皆様どうぞご自愛ください。　（広報担当幹事　豊島　登）